可視化情報 100 号*

川橋 正昭**

The hundredth Issue of Journal of Visualization Society of Japan

Masaaki KAWAHASHI

1. はじめに

「可視化情報」が、1981 年に創刊された前身の流れの可視化学会誌「流れの可視化」から、通算 100 号になるという。かつて「可視化情報」の編集に携わった経験がある者として、大変感慨深いものがある。このような記念すべき機会に、一文を寄せることができるのは大いなる喜びである。

2. 「可視化情報」との係り

「可視化情報」は、なぜか私の研究室の書棚の中で一番目立つところに置かれている。しかも、学会の前身となった「流れの可視化シンポジウム」の第一回シンポジウム講演集から、「可視化情報」の最新号まで全てそろっている。特に意識してその場所に置いた記憶は無いが、いつのまにかそのような状態が続いてきた。これには、それなりの必然性があるのかもしれない。私の研究室では、常に可視化が実験解析法の基本になっていることも一つの理由かもしれないが、一番大きな理由は、「流れの可視化」から「可視化情報」の 20 数年を経ても、その掲載記事の内容を見るたびに、いつも新鮮さを感じることにある。たとえば、「流れの可視化」創刊号の展望・解説の“流れの可視化で何がわかるか (1~5)”¹⁾を見て、いまだに流れの物理現象を理解するために有用な情報を与え続けている。たしかに、可視化法の技術は目覚ましい進歩を続け、多次元、時系列、マイクロ・ナノスケールの可視化など、従来技術ではなし得なかった情報が得られるようになってきている。そして先端的科学技術の広範な分野で、ますます重要な役割を果たしている。たとえそうであっても、24 年前の創刊号の記事に掲載されている記事の内容や可視化写真は決して古さを感じさせない。

「可視化情報」が他の学会誌に比べて、いつも手に取りやすい位置に置かれているもうひとつの理由は、学会

が極めて広範囲な分野を包含していることから、異なる分野に関連したさまざまな興味深い特集記事が組まれていることであろう。編集に携わっていたときも、特集記事の企画にはそれなりの苦労もあったが、編集委員会で提案されたさまざまな企画に基づき、異なる分野の方に執筆をお願いすることは、間接的に自らの守備範囲を広げるのに大いに役立った。

私自身も、「流れの可視化」および「可視化情報」には、研究成果の発表や、関連した可視化法についての解説など、多くの執筆の機会があった。中でも、現在の主要な研究テーマの一つである流れの定量的可視化計測法については、「流れの可視化」Vol. 2, No. 6 の特集「第 10 回記念流れの可視化シンポジウム」に掲載されている講演概要の中の一つであるスペックル写真法に関する研究の発表²⁾が、重要な意味を持っている。いまになって講演論文の構成や、図・写真などを見直してみると、恥ずかしい限りであるが、この講演論文がその後の私自身の研究の一つの流れを大きく決定付けた。これらのことから、「流れの可視化」から「可視化情報」へと通算 100 号に至るまで積み重ねられてきた歴史は、私自身の研究の歴史とも多くの部分で重なっている思いがある。

3. おわりに

可視化情報学会の規模は決して大きくはない。しかし、「可視化情報」は、これまで科学技術の最も基本的な部分と、最も先端的な部分を併せ持つユニークな情報誌として、広くその役割を果たしてきた。そしてこれからも変わらずに、その役割を果たしていくことを確信している。

参考文献

- 1) 流れの可視化, Vol. 1, No. 1 (1981) pp. 24~49
- 2) 流れの可視化, Vol. 2, No. 6 (1982) pp. 409~414

* 原稿受付 2005 年 11 月 4 日

** 正会員 埼玉大学 工学部